

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：34448

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04236

研究課題名（和文）認知症高齢者と子どもの世代間交流に携わる施設職員への交流支援プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an Exchange support program for facility staff engaged in intergenerational exchange between elderly people with dementia and children

研究代表者

南部 登志江 (nanbu, toshie)

森ノ宮医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：40568391

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、認知症高齢者と子どもの世代間交流を仲介する職員への交流支援プログラムを作成し、交流に活かすことを目的とした。頻回に交流している施設での交流を観察するとともに、保育士、介護職員などへインタビューを行った。その結果、高齢者、子ども、職員は有用感や回想、役割意識などを感じていた。しかし、開催した施設職員、保育士合同学習会や現場での交流などで支援プログラムを活かすことが不十分であった。また研究の対象者数や観察した回数が少なく、さらに継続することの必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、高齢者施設職員と保育士と協働して行うことができる交流支援プログラムを開発し、成果を実践の場に還元・活用することにつながる。また、認知症高齢者と子どもの世代間交流の実態や課題を見出すことができた。

高齢者施設職員と保育士、教育者による合同学習会から、他の施設で行っているプログラム内容、進行方法の技術、継続・発展につなげる工夫などが発表された。まだ交流をしていなかった参加者は、世代間交流の意義を考へることや、新たに交流開始を考へるきっかけにつながっていた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to create a support program for the staff who mediate the intergenerational exchange between the elderly with dementia and their children and utilize it for the exchange.

We visited the facilities where we interacted frequently.

Through interviews with the elderly, children and staff, I was able to learn about the effects and challenges of the interaction. Although I had a joint learning session and learned, I could not make use of the support program because the number of participants was small.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者 子ども 世代間交流 保育士 施設職員 支援プログラム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

我が国では、団塊の世代が75歳以上になる2025年には700万人が認知症高齢者になると推計されている状況をふまえ、2015年に認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)が策定された。その基本的な考え方は、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域で自分らしく暮らせる社会の実現を目指すことである。しかし3世代世帯の減少など家族形態の変化や地域力の低下などから、認知症高齢者とその家族を地域で支えることが難しくなっている。

世代間交流は1960年前後から注目されるようになり、自然発生的な世代間交流が活発化してきた(草野,2004)が、その傾向として都市部での年間の実施回数は少ない(南部,2014a)。その要因として、便利な日常生活で世代が支えあふ必要性が希薄になってきたことや子どもが高齢者と触れ合うことに対しての不安を抱く保護者の存在などが報告されている(關戸,2006)。認知症高齢者も子どもも同世代同志や介護者、保護者との関わりだけでは、お互いに対して苦手意識を抱き、また子どもにとって認知症高齢者は怖い人という誤った認識を抱いてしまうことが危惧されている。また、この結果は同様に文献研究からも職員の時間的な負担や事故が起こらないかという不安が顕在していることが示唆されている(藤原,2012)。

一方、国外の報告においてはアメリカで1986年に「ジェネレーション・ユナイテッド(諸世代連合)」という世代間交流全国組織の結成や(Sally,1987)、英国をはじめとする北欧でのインタージェネレーション・コミュニティに関する活動報告がある(木林,2005)。このことから、我が国においても 関係を築く 社会適応能力を向上させる 知識を深める 機能的・学問的な能力を向上させる 意思疎通を良くする 自尊心を高くもつことを可能にした世代間交流に関する組織的な研究および実践活動のさらなる進展が急務な課題である。

我が国における認知症高齢者と子どもの世代間交流の研究の動向としては、実践報告が殆どであり、認知症高齢者と子どもとの関わり内容の実際について調査したものや施設職員の不安や負担感などの実態調査および課題達成にむけた方策についての報告は散見する程度にとどまっている。研究代表者は、世代間交流を実施する職員は調整業務や参加者の体調管理を行うことの負担が大きいという結果を得た(南部,2014b)。また2015年の高齢者ケア施設職員および保育所職員へのインタビューから、交流の形態が施設を訪問しあう場合のみでなく地域の催し物への参加や施設を開放することなどによる幅広い年代の参加や地域住民を巻き込んだ交流など様々な形態があることがわかった。しかしそれらは施設独自で行っていることが多く、職員は方法や内容について手探り状態である。

2. 研究の目的

そこで、本研究では以下の2点を明らかにすることを目的として研究を行った。

(1) 高齢者ケア施設の職員と保育所職員の世代間交流に対する不安、負担感など世代間交流の実態把握と課題を明らかにする。

(2) 文献による最新の知見および先行研究と(1)の結果からその課題の解決をするために高齢者ケア施設職員や保育所職員を対象とした世代間交流支援プログラムを開発し、合同学習会や実際の交流で活用・評価する。

3. 研究の方法

研究協力体制

本研究では、老年看護分野の教員、小児看護分野の教員で構成した。

研究代表者：南部登志江 研究の全過程において責任を持ち、研究が円滑に進行するように、総

括を担当する

研究分担者：山崎尚美 聞き取り調査、研究会開催にあたっての企画・運営、学習支援プログラムの作成をする

連携研究者：小島賢子 文献検討・整理、実態調査、聞き取り調査、調査集計および分析を担当する

研究連携者：寺田美和子 調査票作成、実態調査、聞き取り調査票の作成を担当する

島岡昌代 実態調査とその分析、プログラムの作成を担当する

研究協力者：松原寿美恵・吉井重子 プログラムの作成、学習会協力を担当する

平成 28 年度

平成 28 年度は、文献研究による世代間交流の意義や課題について知見を得るとともに国内のモデル施設の世代間交流の活動実際を聞き取り調査する。

(1) 文献研究:(小島・島岡) 過去 10 年間における知見に基づいた、認知症高齢者の世代間交流の実態や課題を把握する。検索結果は、文献整理ソフトで整理・要約し、文献から得られた結果はアブストラクトシートを作成して、世代間交流における研究の動向を分析する

(2) 概念枠組みの再検討:(南部)

(3) 国内のモデル施設調査:(南部・小島・寺田) 国内で高齢者ケア施設と幼児施設が合築し、常時高齢者と子どもが交流している施設(富山県・東京) 年間 12 回以上の世代間交流を行っている高齢者ケア施設(神奈川県・大阪府) の施設長・看護職・介護福祉士・保育士に対して「世代間交流の実際や課題」「認知症高齢者との交流の実際」「世代間交流を調整する職員の不安や負担感」について聞き取り調査を行う。

(4) 実態調査:(南部・山崎・島岡) 大阪府下・奈良県下の高齢者ケア施設 5 か所および保育所 5 か所で実施している世代間交流に参加し、フィールドノートを作成しながら参加観察法を用いて実態把握を行う。収集したデータは質的に要旨分析する。

平成 29 年度

全国の高齢者ケア施設の職員および保育所の職員に実態調査を行う。さらに豪州・メルボルンの La・Trobe 大学およびメルボルン郊外のナーシング・ホームで交流の実際をヒアリングにより把握する。研究結果を参考にした世代間交流支援プログラム(案)を作成する。

(1) 実態調査:(小島・寺田) 全国の高齢者ケア施設および保育所の各 2,000 施設に対して、世代間交流の実施有無・交流の実態・参加状況・職員の不安および負担感・実施時の課題について自記式質問紙調査を実施し、データは量的に統計処理する。

(2) 国外のモデル施設調査(ヒアリング):(南部・山崎) 初等教育においても教育活動の一環として積極的に世代間交流の推進を行っている豪州・メルボルンの La・Trobe 大学と大学の教員が自ら臨地において世代間交流の実践を行っているメルボルン郊外のナーシング・ホームで、認知症高齢者と子どもとの世代間交流の実際や交流の在り方への知見を得る。メルボルンの La・Trobe 大学の教員およびメルボルン郊外のナーシング・ホームには、平成 17 年から研究分担者(山崎)との連携体制が整っており研究協力に対する内諾を得ている。

(3) 世代間交流学習支援プログラム(案)を作成:(全員) 文献および先行研究の結果を参考に、斬新的なスタイルの支援プログラム(案)を作成する。

平成 30 年度

前年度に作成した世代間交流支援プログラム(案)に基づき、高齢者ケア施設職員と保育所の職員による合同学習会を開催するとともに、大阪府・奈良県下の 3 施設で活用し、世代間交流支援プログラムの評価・修正を行う。また、得られた研究成果は国内外の学会等で公表する。

(1) 合同学習会の開催:(全員) 前年度に作成した世代間交流支援プログラム(案)に基づき、奈良県下において高齢者ケア施設および保育所の職員に対する合同学習会を開催する。

(2) 世代間交流支援プログラム(案)に基づき、大阪府・奈良県下の3施設で実践する。施設長には内諾を得ている。(全員)

(3) 世代間交流支援プログラムの評価・修正:(全員) 合同学習会および施設での実践から得られた結果に基づき、世代間交流支援プログラムの内容を修正する。

(4) 研究成果の公表:(全員) 研究成果は、報告書としてまとめ国内の学術集会で発表ならびに学会誌に公表する。

平成 31 年度

平成 28 年度に計画していた、常時高齢者と子どもが交流している施設(富山県・東京)年間 12 回以上の世代間交流を行っている高齢者ケア施設(神奈川県・大阪府)の施設長・看護職・介護福祉士・保育士に対して「世代間交流の実際や課題」「認知症高齢者との交流の実際」「世代間交流を調整する職員の不安や負担感」について聞き取り調査を行う予定であったが、東京都、富山県などの施設長等からのインタビューが行えていないので、1 年延長して行う。

4. 研究成果

研究の主な成果

平成 28 年度は、(1) 国内外の文献レビュー(2) 学術集会への参加及び報告(3) 幼児と高齢者が日常的に交流している保育所及び高齢者施設での交流を視察した。

(1) については、国内外における過去 10 年間の文献を検索し、その動向や調査方法、内容などをまとめた。(2) については 2 か所の保育所での交流のまとめと意義・課題をまとめ、学会で発表した。(3) については 2 か所の保育所での交流観察を行った。このことから実際の交流方法やプログラム、幼児や高齢者への影響について理解できた。

平成 29 年度は、全国の保育所、高齢者施設での交流視察とインタビューは実施できなかった。

(1) 豪州で大学およびナーシングホーム、幼稚園、図書館で視察と聞き取り調査を行った。豪州は多民族であり核家族世帯が多い。そのため祖父母と離れて暮らす子どもが多いことから、子どもと高齢者の交流は両者にとって多くの効果があることが分かった。方法も iPad などの活用や教育プログラムとして中学生・高校生が施設で生活する高齢者との交流をしていた。結果は学会で発表した。

(2) 頻回に交流している高齢者施設で、実際の交流を参加観察した。事前に職員にインタビューを行い、交流後に高齢者、幼児にインタビューした。しかし幼児 7 人、高齢者 3 人と対象人数が少なく、今後続けて研究していく必要がある。

平成 30 年度は(1) 交流支援プログラム案に基づき合同学習会を行った。交流の実際や効果、課題などについて報告するとともに、世代間交流の概要について報告した。参加者は 13 名と少なかったが、質疑応答や評価会などから各施設での今後の継続や発展のための方向性を見出すことができた。

(2) 世代間交流支援プログラム案の内容が一般的であり、具体的な内容が少なかったことから、施設での交流に活かすまでには至らなかった。

平成 31 年度はデンマークでの認知症施策、世代間交流のナーシングホーム、認知症デイケア、看護協会などでの実際を視察した。福祉が充実している国での高齢者施策は、基本的な高齢者観をもとに実施されていることが分かった。また認知症当事者も主体的に生活や他者への支援を行っていた。30 年度に行った合同学習会の内容を冊子にまとめ、協力してくれた施設職員や興味を持ってくれた人へ手渡した。

得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

高齢者と子どもの世代間交流は、地域力の低下や高齢者、子どもの生活形態などが変化している現在の日本において必要なことであるが、単発での開催は行うことができても継続することは難しく、開催回数の増加や新たな場所での実践は思うように増えていない。さらに職員の支援に視点を置いた研究は少ない。そこで今回の研究において、職員への支援プログラム開発という研究をすることで、高齢者ケア施設職員や保育士など関係する多職種で学習会を行いプログラム作成につなげるという研究は、両者に連携の必要性や研究の必要性を認識してもらえきつかけとなったと考える。実際に自分たちが行っている交流の実際を振り返り、評価を行うことで、何気なく行っていることの評価が可視化できたと考える。また、研究者や職員が合同学習会や学会等の場で研究の成果を発表したことも、交流への意識と研究としての必要性を感じることもできたと考える。

海外においても世代間交流を教育課程に取り入れているオーストラリアやデンマークなどの先進的な活動を知ることができ、新たな知見を得ることができた。その中で、日本において高齢者施設や地域で生活する高齢者支援の視点での世代間交流は多く実践されていると認識してもらえ、興味を持ってもらうことにつながった。また多くに場で意識的に世代間交流をしていることも理解してもらうことができた。今後も国内の学会のみでなく、海外での発表を続けることの必要を感じた。

今後の展望

高齢者施設職員や保育士は高齢者と子どもの世代間交流の必要性や意義は理解しているが、職員の理解や負担などによる理由から思うように継続・発展していないことがうかがえた。また、新たな施設でも交流会を持ちたいと思っているが、時間的、人的負担が多く、思うように進んでいない。しかし、継続している施設では毎年多くの工夫がされており、職員も交流するのが当たり前ととらえていた。これらから、研究として実践、評価・考察を研究者とともに行うことで、自分たちの交流について課題や発展方法について、解決する方策が見出せると考える。

しかし今回の研究において、研究として参与観察を行ったり調査した施設は関西の一部の施設と人数であることや、少ない観察回数であり、全国的な調査を行うなど地域の特色や工夫を生かすまでには至らなかった。また、作成した交流支援プログラムも世代間交流での実際の場面で活かすまでにはつながっておらず、今後も継続して研究し検討することが必要と考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 南部登志江	4. 巻 Vol.22 No.2
2. 論文標題 高齢者と子どもの世代間交流の意義-大阪府下および奈良県下の高齢者ケア施設職員と北支へのインタビュー調査-	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本看護福祉学会誌	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 南部登志江
2. 発表標題 施設を利用する高齢者と保育所幼児の世代間交流観察からの考察
3. 学会等名 日本認知症ケア学会2018年度関西地域大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nanbu Toshie
2. 発表標題 Intergenerational Exchange Between Nursery school children and Nursing home residents
3. 学会等名 32st International Conference of Alzheimer's Disease International（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 南部登志江
2. 発表標題 高齢者と幼児の世代間交流の効果や課題に関する文献検討
3. 学会等名 日本老年看護学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nanbu Toshie
2. 発表標題 Facts and Significance of Intergenerational Exchange Between Older People With Dementia and Children
3. 学会等名 31th International Conference of Alzheimer's Disease International (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	山崎 尚美 (平木尚美) (yamasaki naomi) (10425093)	畿央大学・健康科学部・教授 (34605)	